

卷 頭 言

気象学会創立100周年記念を迎えるにあたって

理事長 岸 保 勘三郎

日本気象学会が本年5月3日に創立100周年記念日を迎えるにあたり、この日を会員の皆様と共に祝したいと思っております。

学会では100周年記念事業のひとつとして、機関誌「天気」の1月号より毎号レビュー記事を掲載するとともに、4月号にはレビュー、座談会、通史、総目録からなる特別号、同「気象集誌」は2月に特別号の発行を予定しております。この機会に上記「天気」のレビュー等執筆者の方々、「気象集誌」特別号への国内、国外からの論文投稿者に厚くお礼申しあげます。併せて「天気」、「気象集誌」の編集部企画、編集に際してのご尽力に対しても謝辞をのべさせていただきます。

100周年記念式典は5月25日東京神田の日本教育会館で行いますが、会員多数のご参加を希望致します。また10月18~22日の5日間、日本で日本気象学会主催、WMO、気象庁、アメリカ気象学会後援にて、“熱帯気象に関する地域科学会議”を開催することも記念事業のひとつとして計画しております。

以上学会としての100周年記念事業の計画をのべましたが、学会創立以来100年の長い年月にわたっての諸先輩の努力の積み重ねというものを、この機会に改めて思いおこす次第です。その苦勞の一端を示すものとして、昭和16年7月、気象学会が社団法人として認可された時の、学会の沿革記事を引用させていただきます（昭和17年「気象集誌」第1号）。

“本会は明治15年5月3日創立され、東京気象学会と称え、最初は同業者のみの気象知識涵養の機関であった、隔月に気象集誌を刊行し、明治17年第1号まで都合

12号を発行して中絶するのやむなき事情となったが、明治21年6月同業者も多くなり、外に関係諸員をも網羅し再興し大日本気象学会と改称した。以後度々盛衰あり機関雑誌の刊行さえ覚束なくなった。それで明治30年6月総会に於て維持の方策を講じた結果、中央气象台及各地方測候所は、一部宛購入するものとし売価を普通売価（1冊拾銭）の3倍として団体官庁は会員となることを認めないことに決議し、茲に確実な財源を得た。……昭和15年10月25日総会に於て社団法人に組織変更を決議し、昭和16年7月18日文部大臣より設立認可され社団法人日本気象学会と改称し同年8月11日登記を了した。”当時の会員数は理事長岡田武松以下1096名と記録されています。

機関誌「気象集誌」は上述の沿革史にもありますように、長い年月の間には出版さえ覚束なくなった時代もあります。現在100周年を迎えて特別号を出せるまでに発展してきました。

今後ますます掲載論文の質的向上、量的拡大ということが大切になってきましたが、機関誌の充実とは別に、ここでは今後の問題のひとつとして気候変動に関するデータ収集について少し感想をのべてみたいと思います。

前年の新年号巻頭言でもFGGE (First GARP Global Experiment) のデータ利用についてふれておきましたが、このデータは史上はじめて全球的規模で集められたものです。今後このデータをうまく活用すれば、計り知れない研究成果が期待されると思います。同時にこのデータを中心にして、過去のデータを検討し、更にこれからの新しいデータを蓄積することによって、日本でも気

候変動データバンクを確立することが可能となります。日本では、今まで日本を中心にした中緯度地帯のデータ蓄積に関心が払われてきましたが、赤道域、南半球のデータ蓄積のことも考慮すべき時代にきたと思います。

1979年の冬と夏に GARP の一環として実施された MONEX (Monsoon Experiment) の結果をみますと、アジア大陸からの冬の寒波は遠く南支那海、マレーシア半島、更に赤道をこえてインドネシア付近まで影響を与えていることが明らかになりました。もう少し具体的にのべますと、中国大陸からの寒波は南支那海をってインドネシアにまで達します。この流れに対応して広い意味での海陸風がボルネオ北西岸域でおこり、両気流の合流域では強い降雨をもたらします。また中国大陸からの寒波は流れの様子によっては、インドネシア東部で、冬のモンスーン時には1日に30mm位の降水量が記録されることもあるようです。MONEX 実施以前は南支那海上での観測がなかったので、上述の降雨の原因をよくしらべることができませんでした。1978年/1979年の冬の MONEX ではじめて降雨の実体がつかめたようです。この点で東南アジアの研究者は、MONEX によってやっと研究のスタート台に立つことができるようにな

ったと大変喜んでます。一方南半球、赤道付近の大気循環の変動、特に赤道域での上昇流の強弱によって、中緯度の長期的な大気大循環も影響をうけるといわれています。特に後者の点は、FGGE のデータなどを活用して、中緯度と赤道地方との相互作用の観点から問題点を明らかにする必要があります。

これらの問題ひとつとりあげても、全球的データバンクの確立は、気候変動の実体を知る上で大切な課題となってきました。

FGGE, MONEX が終了したこれからは、赤道域、南半球のデータを収集する場合、どうしてもこれらの地域の研究者と直接的な研究交流が必要になってきます。

どこかの国の大学もしくは研究機関がデータ収集の労をとってくれるのを待つという受身の形でなく、日本の研究者が直接に東南アジア、南半球の国々へ出かけ、現地でデータを収集したり、また研究面では東南アジア、オーストラリアなどの研究者との往来を活発にし、これらの国々の研究者と自由に討論ができるようにする必要があります。そのような時代が早く実現して欲しいと切望する次第です。